障害者の〈いのち〉
――歌を歌いながら考える――

小畑清剛

はじめに

学長先生、ご紹介をありがとうございました。

みなさん、こんにちは。小畑と申します。今、学長先生がおっしゃってくださいましたけれど、そんな大した話はできません。みなさんリラックスして、眠たかったら寝てもらっても結構ですので、気楽に聞いてください。あんまり大きな声では言えないないですけれど、もう五コマ目ですからね。疲れてると思いますので。できるだけ面白いように話したいとは思いますが。先ほど先生もおっしゃってくださいましたけれど、僕には障害がありますので、すいません、ちょっと座らせてもらいます。でも、やっぱり立ってお話しま

す。

今日は、一時間を三つのパートに分けたいと思います。第一のパートがみなさんにお渡ししていたプリントに関したお話で、「障害者の〈いのち〉」がテーマです。そして次が歌謡ショーです。つまらない歌ですが、みなさんがぜんぜん知らないような懐メロを歌わせてもらおうかなと思います。三番目は、せっかくの宗教講座ですので、親鸞聖人と、親鸞聖人の先生だった法然上人、法然上人の教えを徹底的に批判された明恵上人、この三人の考えを、障害者の〈いのち〉と関連したところでお話させてもらいたいなと思います。

心と身体

みなさんは、人間って何だと思いますか。人間は○○と○○でできているとしますと、何と何でできていると言えますか。たとえば、男と女でできている。あるいは、親と子でできている、先生と学生でできている、日本人と外国人でできている…、いろんなことが言えると思います。これは人類全体の中で人間をどういうふうに捉えるかということですが、そうではなくて、みなさんの一人ひとりを考えた場合、あなたは何と何でできている

か、ちょっと考えてもらいたいなと思います。そうすると、いろんな答えが出ると思うのです。人によってさまざまで、数学のように一つの正解が出るわけではないと思いますが、一つの有力な考え方として、心と身体でできている、と言えるのではないかなと思います。今日お話したい最初のテーマは、この「心」と「身体」です。

障　害　者

私は障害者です。みなさんにもお友達に障害者がいらっしゃるかも知れません。身体が不自由で車椅子に乗っているとか、スポーツができないとか。しかし、その人たちが人間として欠陥があるということでは全然ない。彼／彼女たちには心がきれいな人が少なくない。だから、心と身体は関係しているのだろうけれど、別々のものだと考えられます。実は私の母も障害者だったのです。私は、生まれつき左目が全く見えない。硝子体が赤ちゃんの時に既に破裂しちゃっているのです。先天性硝子体破裂という病気です。そして、母と私以外の親戚には障害がないので原因が全くわからないのですが、指がないのです。ちょっとはあるのですよ。でも母の場合は手と足の指がほとんどなかったのです。僕も右

手はまともな指が一、二本、左手はちょっとましでまともな指は三本です。それで、きたない字しか書けないということがあります。そういう意味で、他の人と違う身体とどう折り合って生きていくかということは、私の子どもの頃からのテーマだったわけです。みなさんの中にも障害を持っておられる方がいらっしゃるかもしれませんが、多くは健常者だと思いますから、あんまり自分の身体と向き合ったことはないかもしれません。しかし、障害を持っている人は、自分の身体と運命的に直面することがあります。場合によっては「私には身体なんていらない。心さえきれいならそれでいい」と考える人もいます。これを私は「内閉」と呼んでいます。内閉とは、自分の心の内部に閉じこもるということです。身体なんて大した価値はない。こんな身体の障害は私にとって全然重要ではない。心だけ純粋で、清く、正しく、美しく（宝塚みたいですけれど）、あればよい――そういう生き方を追求していく考え方です。そういう点から、出発点としてちょっと比較してみたいのが、今、噂になっている乙武洋匡さんと、塔和子さんの生き方です。

『眞實心』第三十八集　平成28年度2017年3月発行（京都光華女子大学）

五体不満足

まず、乙武さんです。最近は不倫をしたといって週刊誌のゴシップ記事になっていますよね（昔は浮気と言っていたのですけれど）。「倫」は人間として行うべき道、「不」によってそれを否定していますから、乙武さんは人間としての道を外れたということで叩かれています。でも、正直に言うとちょっと可哀想だなという気もするのです。そのお話を少ししてみたいと思います。もちろんやったことは悪いんですよ。みなさんは女の人だから、もし乙武さんが旦那さんだとして、「あんな浮気をしていたら絶対に許さない、離婚するわ」と思うかもしれません。やったことは悪いのだけれど、ちょっと可哀想な面もあるのではないかなと私は思うのです。例えば、乙武さんはベストセラーになった『五体不満足』で次のように告白しています。

どうしてボクは障害者なのだろう。多くの人が健常者として生まれてくるなか、どうしてボクは身体に障害を持って生まれてきたのだろう。そこには、きっと何か意味

があるのではないだろうか。……実際に車椅子に乗っているボクのような人間が、一段の段差を前に、「ボクたちにとっては、この一段の段差が何より壁なんです」と訴えた方が、影響力は強いように思う。……〔しかし、ボクは〕せっかく与えてもらった障害を活かしきれていない。……ただ、障害を持っているというだけではダメだ。それでは、お門違いの特権意識になってしまう。

何百万冊と売れた本です。僕なんか本を書いても五〇〇冊も売れないですから。何百万と売れたベストセラーの中で乙武さんはこう言っているのです。今は何の仕事をしてるか分からないですけれど、当時は小学校の先生とか、スポーツライターをされていたのです。僕は彼が小学校の先生になってよかったなと思ったのですが、残念ながら三年ぐらいで辞められました。乙武さんは「乙武洋匡にしかできない」使命を、小学校の教師になること、スポーツライターになることに見出しました。どちらも本来「身体」によって、子どもたちやスポーツ選手と交流するための社会的回路が開かれていることを前提とする仕事です。さっきの、身体的欲望の回路や社会的交流の回路が閉鎖されていてもかまわない内閉とは、違う生き方ですよね。身体に関係のないところで生きていこうというのが内閉で

すけれど、乙武さんはむしろ、不自由な身体を使って積極的に人と交流する生き方を選んだわけです。ただ、そういう乙武さんの生き方に対して、ちょっと問題があるのではないかと思う人もいます。例えば評論家の小浜さん（今、日本に来ているオバマさんとは違うおばまさんです）は、次のように乙武さんを批判しています。

小浜逸郎さんの批判

私が『五体不満足』のような戦略的ネアカ志向の本（読まれた方は分かると思いますが、ものすごく明るい本です。障害者だからといってうじうじしてない。私には、こんなことも出来ると頑張っている本です）に感ずる違和感のうち最大のものは、著者が再三にわたって、自分は親や教師や友人など、周囲の環境に恵まれたので、自分を障害者として意識する機会がなかったと述懐している点についてである。それは、やっぱり、ウソではないでしょうか。

小浜さんは乙武さんが子どもたちの「まなざし」に取り囲まれた様子を告白した以下の一

文に注目しています。これは乙武さんの本からの引用です。

向こうから、やはり学校帰りとみられる小学生低学年の男の子五～六人がやってきた。彼らは、ボクの姿を見つけると、口々に「何だあれ」「気持ち悪い」と叫んだ。こんなことは日常茶飯事である。

この告白を根拠に、小浜さんは「乙武さんのネアカ戦略はこの情景描写でほころびを見せている」と断定しています。乙武さんは、身体は不自由だけれど、全然悲しいことなんてなかった。良い親がいて、良い友だちがいて、楽しいことばっかりだったと書いているのですけれど、その中に、小学生に囲まれて「何だあれ」「気持ち悪いな」と言われたことがあると告白しているのです。これは僕も言われたことがあります。「指がないんだ」「おばたは、おばけやな」。乙武さんは僕よりずっと障害は重たいです。自分の身体について「辛いな」と思ったことがあるはずだと、小浜さんは言うわけです。

承　認

ここでみなさんに考えてもらいたいのは、障害者にとって自分が生きている根拠といいますか、生きている支えといいますか、それは何だろうかということです。それは「承認」だと僕は思います。人間として認めてもらう。人間として承認してもらう。これが大事ではないかと思います。私はもともと理学部に入ったのですが、法学部に変わって、その法学部で民法とかあまり分からなくて法哲学に逃げちゃった人間なのですけれど、その法哲学で、G・W・F・ヘーゲルというドイツの偉い学者が「人間にとって大事なのは承認だ」と言っています。僕たちは一人で生きているわけではない。友だち、先生、お父さん、お母さん、その中で生きているわけです。例えば、みなさんは、先生には真面目な学生として承認してもらっている。お父さん、お母さんには可愛い娘として承認してもらっている。友だちには信頼できる友人として承認してもらっている。それが支えになって生きていけている。だから、この「承認」は人間にとってものすごく大事だということです。

障害者の不安

そこで、若いお嬢さんたちに聞くのはちょっとどうかと思うのですが、例えば、二十歳ぐらいの障害を持った女の人の悩みは何だろうか考えてみてください。みなさんとほぼ同い年の女の子が悩むことはいろいろあると思いますが、そのうちの一つが、「私は一生ヴァージンではないか」ということではないかと思います。つまり、男の人に愛される身体として承認してもらえないのではないかという不安です。男の障害者にとってもそうだと思います。特に思春期の障害者にとって、生きる「生」と、セックスの「性」は重要な関係にあると思うんです。例えば、小山内美智子さんという脳性麻痺の方の書いた『車椅子で夜明けのコーヒー』という本があります。また、安積遊歩さんは、先天性骨形成不全症という生まれつき骨を作る力が弱く、身長が低くて、骨折しやすい障害があるので車椅子に乗っている方ですが、この女性は『癒しのセクシー・トリップ』という本を書かれています。このことは、障害を持った女の人たちにとって、自分が男性に愛される人間であるかどうかが大事だということを表していると思います。

恋の季節

何故『車椅子で夜明けのコーヒー』かと言いますと、みなさんの、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんはご存じかもしれません。昔、「ピンキーとキラーズ」というグループがいたのです。ピンキーこと今陽子さんは僕ぐらい身長が高くて、山高帽をかぶって格好いいのですよ。そしてキラーズというピンキーより背の低い男の人たちを従えて歌をうたうわけです。男装の麗人、と言ってもみなさんは分からないでしょうから、言ってみれば宝塚の男役みたいな感じの人だったのです。そのグループが歌う『恋の季節』という曲の「♪忘れられないの　あの人が好きよ　赤いシャツ着てさ　海を見てたの」が一番の歌い出しですけれど、二番か三番に、こういう歌詞があるのです。「♪夜明けのコーヒー　二人で飲もうと　あの人が言った　恋の季節よ」。夜明けのコーヒーを二人で飲もうということは、まさに今晩愛し合って、二人で夜明けのコーヒーを飲みましょうということです。分かりますよね。夜明けのコーヒーは、男と女が愛し合うということの象徴なのです。私は車椅子に乗っている障害のある女の子だけれど、私の身体を愛してくれる

男の人がいて、二人で愛し合って、二人で夜明けのコーヒーを飲んでいる。これがまさに「承認」です。一人の愛すべき人間として私は承認されたのだということです。安積さんの『癒しのセクシー・トリップ』というタイトルの意味も、恋愛とかセックスの経験が癒しになる、という点で分かってもらえると思います。内閉ではなくて、身体をまるごと愛してもらえているということです。私は若いみなさんに、「セックスをしろ」なんて言っているわけではもちろんありませんよ。愛すべき対象として承認されること、尊敬すべき対象として承認されることが、障害者にとっても、とても大切だということを分かってほしいのです。最近注目されている、性同一性不全の方とか、女性同士で愛し合うとか、男性同士で愛し合うとか、そういう人たちもおられるし、その人たちの人権も尊重しないといけないのだけれども、話を単純化するために、申し訳ないのですけれど、ここでは男と女が愛し合うというということにさせてもらいたいと思います。

障害者にとっての承認

そこで再び乙武さんの話に変わるのですが、僕は、乙武さんはものすごい劣等感の塊だ

ったと思うのです。小浜さんの意見に賛成です。乙武さんは「身体は不自由だけれども、全然不幸じゃなかったよ」という内容の本を書いてベストセラーになったけれども、本当は心の中で、「みんなに人間として承認してもらえるだろうか」とものすごく不安だったと思うのです。その不安が、乙武さんの場合は「女の人に愛してもらえるだろうか」という方向に行ったのだろうと思います。僕なんか独身生活が長いですけれど、そういう僕からすると、乙武さんは結婚もして、元気なお子さんもいるので、うらやましい。けれども、乙武さんには心の傷と言いますか、劣等感がものすごくあって、大人になっても自分の身体に不安があったのじゃないかと思います。それが「あなたは愛する価値のある人間ですよ」と言ってもらうために、いろんな女の人と不倫をし続けた原因じゃないかなという気がしています。乙武さんのやったことは、もちろん人間としては悪いことなのだけれども、この「承認」という観点からすると、週刊誌の「障害があるけど元気だな」というような見方は可哀想だと思うのです。あんまり同情するのもよくないのだけれども、内閉とは逆の生き方を選んだからこそ、その身体を女の人に承認してもらいたかったのだと、僕は考えています。

ハンセン病

そして、その逆の、社会的交流の回路を通じた身体の承認なんか必要ないという生き方をされたのが塔和子さんです。塔さんはハンセン病の患者さんです。ハンセン病は皮膚病で昔はなかなか治らなかったのですが、第二次世界大戦の頃にプロミンという特効薬ができました。そして、ほとんど感染しない病気だということも分かったのに、日本では残念ながらずっと偏見が続いて、患者さんは牢屋みたいな場所に長期間入れられていたのです。岡山県の虫明の向かいに長島という島があるのですが、そこに長島愛生園ともうひとつ邑久光明園という、ハンセン病の患者さんを収容した病院があります。その岡山県虫明と長島はものすごく近いのですけれど、つい最近まで橋がかかっていなかったのです。ハンセン病の患者さんが橋を渡って逃げたら怖いから、橋をわざとかけなかったのです。そして何十年か前にやっと橋がかかりました。その時は「人間性回復の橋」と評判になったぐらいです。だから、ハンセン病の人は、ほとんど移る病気でもないし、治る病気になったのだけれども、神経が崩れてきて顔が変形してしまうとか、目が見えなくなるとか、吹

き出物で醜くなってしまうとか、見た目があまりよくない病気なので、昔から、「先祖が悪いことをしたからあんな病気になったのだ」とか言われて差別され続けてきました。また、誤って遺伝病と考える人も少なからずいました。塔和子というのはペンネームです。自分の名前を出したら親戚に迷惑がかかるからということなのです。先ほど私は「僕と母は障害者だけれども、親戚に障害者はいません」という話をしたと思うんですよね。「親戚はみんな健常者ですよ」と言わないと迷惑がかかる。親戚には適齢期の人もいます。結婚に差し障ったらこまるから、どうしても「親戚はみんな健常者です」と言っちゃうのです。それと同じように、ハンセン病の人も、ほんとんどの人が本名を名乗らずに違う名前で病院に入っていたのです。「父母のえらび給ひし名をすててこの島の院に棲むべくは来ぬ」――長島愛生園に来たハンセン病患者の明石海人さんが詠んだ歌です。有名な歌人であった彼もまた、両親がつけてくれた本名をすてて、この島に「来た」のです。患者さんの両親は、親戚にも息子はハンセン病の病院に入院しているとは言わずに「死んでしまった」とか言ったりしていました。寅さんこと渥美清さんが歌う『男はつらいよ』の主題歌は、「♪俺がいたんじゃお嫁にゃ行けぬ　分かっちゃいるんだ妹よ」と始まります。「自分がいるから妹がお嫁にいけない」――『男はつらいよ』はほんわかとした人情喜劇ですが、

医師たちにそう思い込まされたハンセン病の患者さんたちにとってそれは大変に深刻な悲劇です。ですから、患者さんたちは、家族や親戚に迷惑をかけないために本名をすてて、例えば交通事故で死んだことにしてもらって、病院に入ることになるのです。それほど差別がきつかったのです。

聖なるものは木

塔和子さんは、詩集『聖なるものは木』に収められた同名の詩で、次のように語りかけています。

それは／たわわに実ったその実を与え／ねぐらを求める鳥には／その腕のような枝を与え／その幹には疲れた人をもたれさせ／うっぷんを晴らしたい人には傷つけさせ／爪を磨きたい猫にはひっかかせ／小利口そうな人間の／はきかける唾や小便をするままにさせ／さゆらぎもせずに立っている／自らの威信を失うこともなく／どっぷりと広いその愛は／すべての生の重さを支えて／洋々と立ち／なおも大きく枝を張る／

ああ／あなたは木／人の奥の奥／聖なるものは木／木がただ／木であること／それは／何でもないことのようで／こんなにも美しいものか

ここは浄土真宗の大学なのですけれど、塔さんはクリスチャンです。みなさんの中にもクリスチャンの方がおられるかもしれません。キリスト教で木と言えば、連想するのはアダムとイヴのりんごの木ですよね。生命としての木、知恵の木、という意味で、キリスト教にとって「木」はものすごく重要な意味を持ちます。塔さんはクリスチャンとして、自分を木になぞらえて、「木」というものは純粋で素晴らしいものなのだということを詩で表わされたわけです。塔さんをちょっと紹介します。少し前に亡くなられたのですが。

一九四四年にハンセン病を発症した塔和子さんは、国立癩療養所の大島青松園に入園する（さっきは長島でした。こちらも島です。島に隔離しておくわけです）。彼女は詩誌『無限』『黄薔薇』『樫』に次々と詩を発表する一方、ＮＨＫラジオの『療養文芸』にも投稿を続け、村野四郎の薫陶を受けます。そして一九六一年、処女詩集『はだか木』を、六九年、第二詩集『分身』を発表します。その後『エバの裔』（エバはアダムとイヴのイヴ、裔は子孫です）、『第一日の孤独』、『聖なるものは木』が刊行されます。『エバの裔』に収

められた同名の詩は次のように語りかけています。

エバの裔

泉の目／苺の唇／杏の頬／風に吹かれる五月の草のやわらかい髪／雌鹿の足／鬼百合の雌蘂の細い指／新鮮な野生のにおいに包まれた女の／持って来たものは一匹の蛇／ひとりの天使／女は／いつも愛らしく清らかで／誇りにみちていたが／蛇の暗示から抜け出すことができず／疑惑や悔恨や欲望の間をさまよいつづけた／女は昼と夜とを共に抱き／知性と本能に身をほてらして／不可解な魅力に輝く／咲き乱れた矛盾の花園／女／その優しいもの／強いもの／罪深さの故に魅力あるもの／私は／この美しいひとりの女を住まわせている／住居

みなさんは女の人だから、この詩の言っている意味が何となく分かるでしょう。塔さんはクリスチャンですから、アダムとイヴの楽園追放の話が前提となってこの詩ができているということも分かると思います。この詩集は非常に評判になりました。そして高い評価が

『眞實心』第三十八集　平成28年度2017年3月発行（京都光華女子大学）

与えられたのですが、H氏賞という有名な賞には落選しちゃったのです。選考委員に「塔さんの『エバの裔』は、受賞に値する高潔な詩であるが、整い過ぎている点が多くの不満をかったのではなかろうか」と言われました。また「私はこの詩集の完成度の高さ、精神の美しさなどに感動しながらも、やはり郷原／長田氏（他の詩人です）の詩を高位におこうとしている自分に絶望的な気持ちになりました」とも言われました。こういう批判的な意見もあったのだけれども、有名な詩人である大岡信さんは次のように言っています。

塔和子さんの『エバの裔』には、詩をかくことが、痛切に、生きることの同義であるひとつの生のあり方が示されている。私はこの詩集を好ましく思い、塔さんの詩作態度に敬意を表わしたい。……〔塔さんの詩に欠けているとされる技法上の斬新な試みは〕あまり必要なものではないのだと思う。私は、塔さんの詩が不運な病の中で書きつがれていながら、決して甲高く絶叫もしなければ絶望もせず、ほのかな明るみへたえず向おうとし、事実それを言葉の中に捉え得ていることを重視したい。

こう高く評価されています。まさに、塔さんの詩の高潔さ、詩の美しさ。それは彼女の心

の美しさを反映しているのだけれども、それは内閉という精神の境地の素晴らしさを見事に実現しているわけです。塔さんは、ハンセン病で自分の身体が醜くなっているとか、変形しているとか、そういことを全く書いていません。彼女にとって必要なのは、心です。ハートです。魂です。心が純粋になって、魂が美しくなって、立派な詩を書くことができたら、それで彼女の「生」が完成しているわけです。だから、こちらの「性」はあまり彼女にとって重要ではありません。塔さんが、自分自身を木に喩えて、その木に「聖なるもの」という形容を行う時、「自己肯定を貫く自己聖化」がなされています。自己聖化するならば、他者に承認されることは不要になります。塔さんの内閉という生き方では、原則として他者は必要ありません。内閉ではない人は、つまり、さっき言った『車椅子で夜明けのコーヒー』とか、『癒しのセクシー・トリップ』とかを著した女性は、自分の身体を含め、まるまる人間として他者（特に男性）から承認してもらおうとしますが、塔さんは、心と身体で人間ができているとすると、他者の承認を求めるような身体はいらないのだという立場です。心を純粋にして、精神だけを美しくして、自己聖化して、素晴らしい詩集を作ることが生きがいだと考えたのです。だから彼女にとってセックスの意味での「性」は、ほとんど意味がない、関係がないものだと言うわけです。

『眞實心』第三十八集　平成28年度2017年3月発行（京都光華女子大学）

塔さんへの要求

ちょっと面白いのは（面白いと言ったら語弊がありますが）、詩人の森田進さんという人が、塔さんに要求を行っていることです。二つありますが、一つは、「一般社会がほとんど登場してこない。もっと庶民の人生の底の方へ出張してほしい」。もう一つは、「病者である（ハンセン病を患っている）ことを……正面切ってとりあげる気はないか」という二点の注文です。しかし、僕から言いますと森田さんの注文は、はっきり言って無理です。何故かというと、庶民の生活に降りてこいということは、内閉をやめろということでしょう。庶民というのは、心と身体の両方で生きています。庶民の生活に戻れということは、心、魂だけを純粋にする生活をあきらめろということになりますから、塔さんの生き方を全否定することになるのです。それから、ハンセン病患者であることを前面に出せと言っても、ハンセン病とは関係なく、クリスチャンとして、こんなに精神を清らかにして詩を書いているのですよ、というのが病原菌に侵されてしまった身体を完全に捨て去ろうとする塔さんの生き方です。さっき言った『車椅子で夜明けのコーヒー』の人とは正反対

の生き方なのです。

生きがいについて

神谷美恵子さんという人がいます。この人は長島愛生園に勤めていた精神科のお医者さんで、前田多門という、日本が戦争に負けた直後に文部大臣を勤めた人のお嬢さんです。前田（旧姓）さんは語学の天才で、最初は文学部でフランス文学を勉強されていたのですが、みなさんぐらいの時にキリスト教の牧師をしていた叔父さんに連れられて、ハンセン病の人の施設に行きました。そうすると、ハンセン病の人は差別されて、隔離されて、ひどい状態だったのです。そこで、「私は健康なのに、何故あの人たちはハンセン病になったのか」という衝撃を受けたのです。それで、フランス文学を勉強してものすごく才能があったのだけれども、それでは物足りないような気持ちになって、ハンセン病を治すお医者さんになろうと決意して、二十代後半になって医学部に入り直したのです。そして精神科のお医者さんになって、長島愛生園などでハンセン病の人たちの悩みを聞く人になったわけです。その神谷さんが『生きがいについて』という本を書かれていますが、そこでハ

『眞實心』第三十八集　平成28年度2017年3月発行（京都光華女子大学）

ンセン病になった男の人の書いた二つの詩を比較されています。

宣告の記

まず『宣告の記』と題された第一の詩。

――あなたはレプラです／といわれたその一瞬／硝酸をあびせられたように思った／……／ああいやだ！／私一人レプラなんて　とても耐えられない／みんなレプラになれ　みんな／……／ああそれでも私は／この肉体のなかに／自分をゆだねて／深淵のなかで呼吸しなければならないのか

この『宣告の記』を書いたハンセン病の青年の気持ちが、僕はよくわかります。さっき言ったように、僕は指が五本ちゃんと揃っていません。特に右手はぐちゃぐちゃです。私の母も僕と同じように手と足の指がほどんとなかったのです。男の子も女の子もそうですけれど、小さい時はみんなお母さんにくっついていますよね。僕も母にずっとくっついてい

たわけです。父親がいつも夜帰ってきても、「あの男の人何、夜に帰ってきて。何の関係があるんや」って思っていたぐらい父の存在感は薄かったのです。で、人間には、背の高い人もいれば低い人もいる、ぽちゃっとした人もいれば痩せている人もいる…というふうに、いろいろでしょう。だから、母は指がほどんとなくて僕も右の方はひどいものなので、僕は、人はそれぞれ指の数が違うと思っていたのです。島倉千代子さんの「♪人生いろいろ」じゃないけれど、「指の本数いろいろ」だと思っていたのです。だから、五歳ぐらいで、私と母以外はみんな指が五本あるとわかった時にはものすごく衝撃を受けました。どういう衝撃を受けたかというと、母と自分だけが違うという衝撃です。「おまえはおばけや」と言われていじめられていたのですけれども、そうすると、「みんな指が二本になったり、八本になったりしたらいいな」と思うようになるのです。だから、このハンセン病の青年の「みんなレプラになれ」はよく分かるのです。レプラというのはハンセン病のことです。ハンセン病は差別される病気です。しかし、みんながハンセン病になったら差別はなくなります。みんなが平等になるのです。同じように、みんなが指が八本になったり、二本になったら、母と私だけが他の人と違うという状態はなくなるわけです。そういう意味で、僕はこの男の人の気持ちが大変よく分かります。

ところが、これではダメだというのが神谷さんの立場なのです。

待望の詩

次いで『待望の詩』と第された第二の詩。

何時の間にか僕は／人生の片隅を　愛するようになった／ここには子供も青年も老人もいる／元気なものは　倒れたものを背負い／僕らは相愛の軌道を歩むのだ／……／片隅の人には片隅の価値しかないという人たちに抵抗しよう／僕たちは待望の日のために／片隅を愛し／人間性の香り高い生活を創ってゆこう

こういうふうに、この青年は気持ちが変わったのです。そして、神谷さんはこの青年を、人間として素晴らしいと言っているわけです。実際に素晴らしいのです。神谷さんが言っていることは正しいと、僕は思います。つまり、この青年も内閉の立場に移行したのです。最初の詩の「みんなレプラになれ、みんなレプラになれ」――これは一種の呪いで

す。しかし、立派すぎる青年と異なり、「愚かな」私は、第二の詩の「相愛」の立場より、むしろ第一の詩の「呪い」の立場に、どうしても人間的に共感してしまうことになるのです。呪いは他人にかけるものですから、この青年は「みんな＝自分以外の人間」を前提にしていたわけです。マイナスの、ネガティブな形だけれども他者と繋がっていたのです。あまりいい形ではないけれども他者の承認を求めていたのです。その承認が絶望的に得られないと思いながらも、「みんなレプラになれ」、そういう呪いの言葉を他者に向けて発したのです。ところが、神谷さんが絶賛している第二の詩では、他者が出てこない。病院の中で助け合っていくと言っているけれども、みんなが病人だから家族みたいなものです。そうすると、その中では、清く、正しく生きる内閉が求められて、自分を差別するかもしれない他者からの承認は諦められているわけです。つまり、塔さんの場合と同様、「人間性の香り高い生活」を創るものという青年自身による自己聖化が他者の承認に取ってかわっているのです。

ただ、この心を純粋にする内閉という生き方は、神谷さんが言うように、正しくてきれいな生き方なのだけれども、他者と繋がるという点では弱いということになります。塔さんや第二の詩を書いた時点での青年を、僕は心から尊敬しますが、友人にはなれない気が

します。自己聖化しているお二人はあまりに純粋かつ立派すぎて、愚かな俗物の僕には、どのように付き合ったらいいのか分からないのです。ですから、逆に、乙武さんが聖人君子でないと分かって、ホッとした気持ちも僕にはあるのです。それから、もう一つ。内閉は、一般の人間にはものすごく難しい、ほとんどできない、不可能な生き方なのです。みなさんは若い女の人ですから、宝塚みたいな、清く、正しく、美しい生き方は憧れだと思います。憧れなのですが、それがものすごく難しいことはわかるでしょう。人間には身体がありますから、身体が心に反抗しようとするのです。例えば、きれいに生きていこうと思っても、お腹がすいたら「鰻の蒲焼きを食べたいな」とか、カッコいい男の子がいたら「素敵だな」とか、思っちゃうわけです。僕なんか六十のおじいさんになっても、魅力的な女の人がいたら、「いいな」と思っちゃうのです。鰻も美味しいですよね。困ったことに、最近はものすごく値上がりしていますけれども。ともあれ、人間というのは、いくつになっても身体が純粋な心で初めて可能になる内閉の境地に達することを邪魔するのです。これも一つ覚えておいてください。

社会保障と生活保護

ここまでが第一部です。次、昭和の歌謡ショーをやろうと思ったのですけれど、時間がなくなったので、ちょっとだけお話させていただきます。私はこの大学で、社会保障論と生活保護論を教えていますが、一回目の講義では、なかなか学生さんが教科書を買ってきてくれていないので、あんまり授業内容に入れないのです。だから、社会保障の歌（これは勝手に決めているのですけれど）とか、生活保護の歌を歌っています。社会保障（特にその中核である社会保険）の精神は、共助、すなわち「病気・失業・高齢等により困った時は助け合うべき存在」であることを私たちが相互に承認し合うことに基づく制度です。他方、生活保護は、公助、すなわち「あなたは生活に困窮していますが、日本社会で生き続けていけるよう経済的に支援されますよ」という国による承認を前提とした制度です。このことは、「承認」が時として人間の生死を左右することを物語っていますが、社会保障の歌と生活保護の歌も、それぞれ共助および公助における承認をテーマとするものとなります。具体的に言いますと、共助における相互承認の意味が全面に出ている社会保障の

歌というのは、中村雅俊さんの歌う『ふれあい』です。

ふれあい

悲しみに出会うたび　あの人を思い出す
こんな時そばにいて　肩を抱いてほしいと
なぐさめも涙もいらないさ　ぬくもりがほしいだけ
ひとはみなひとりでは　生きてゆけないものだから（♪）

最後の「ひとはみなひとりでは　生きてゆけないものだから」という一節が、恋愛における承認を助け合いにおける承認に読み換えると、みんなで元気なうちにお金を出し合って、病気等になったら助け合いましょう、という社会保障の共助の精神に合っています。それから生活保護も教えているのですが、これはタイガーマスクの歌です。そのオープニング・テーマは、「♪ゆけ　ゆけ　タイガー　タイガーマスク」という勇ましいマーチ風の曲ですけれど、私が今から歌うのは少しもの悲しいバラードのエンディング・テーマで

す。タイガーマスクは、みなさんは知らないかもしれないですけれど、本当にいたプロレスラーで、最初は伊達直人という少年が主人公のマンガの中の人物でした。歌舞伎の世界では、二代目中村勘三郎とか、五代目市川団十郎とか言いますね。実は、タイガーマスクもプロレスの世界で、初代、二代、三代、が現実に活躍していたのです。面白いですね。また、みなさんは幼稚園児だったころ、「♪トラのプロレスラーは　しましまパンツ　はいてもはいても　すぐ落ちる　がんばらなくちゃ　がんばらなくちゃ　がんばらなくちゃあ…」という歌に合わせて、体操やお遊戯をした経験はないですか。これも、「トラのプロレスラー」つまりタイガーマスクをイメージして出来た歌です。それほど、「タイガーマスク」というのは、当時、誰からも愛されるキャラクターだったのです。

タイガーマスク（エンディング・テーマ）

あたたかい　人のなさけも
胸をうつ　あつい涙も
知らないで　そだったぼくは　みなしごさ

『眞實心』第三十八集　平成28年度2017年3月発行（京都光華女子大学）

強ければ　それでいいんだ
力さえ　あればいいんだと
ひねくれて　星をにらんだ　ぼくなのさ（♪）
（＊「みなしご」はあんまりいい言葉ではないのですけれど、昔の歌なので）

これが、そのバラードの歌詞です。みなさんが中学生か小学生の時かもしれないのですが、年末にタイガーマスクの名前で、ご両親がおられない子どもたちのいる施設に、いろんな贈り物が届けられたという話、記憶にあるでしょう。マンガのタイガーマスクもお父さんとお母さんがいなくて施設で育つのです。「強ければそれでいいんだ」というのは直人少年の自分の運命を呪う「呪い」の言葉ですね。そして外国の悪役プロレスラーを育てている所に行って、武者修行して日本に帰ってきて、最初は凶器を持ったり、ものすごく反則をするのですが、だんだん正義に目覚めてきて、自分の出身施設に寄付をする良いレスラーになっていくという話です。これを国に置き換えたら、子供たちが「ひねくれて星をにらむ」ことがないように経済的に援助する生活保護はタイガーマスクの精神だと、学生に一回目から教えます。変な歌を歌ってみんなしらけますけれどね。ただ、ここで、何

故僕が歌が好きかということもちょっとお話したいと思います。

椰子の実

僕が中学一年生の時に音楽の実技テストがあったのです。課題は『椰子の実』で、その二番を歌うことでした。最近は『椰子の実』が音楽の教科書に載ってないというので僕は大変ショックを受けたのですが。これは椰子の実が南方の島からどんぶらこと海を渡って日本の浜辺に漂着したという柳田国男から聞いた実話を、島崎藤村が詩にしたものです。それの二番が音楽の実技テストの課題曲だったのです。では、歌います。

實をとりて胸にあつれば
新なり流離の憂
海の日の沈むを見れば
激り落つ異郷の涙
思ひやる八重の汐々

いづれの日にか國に歸らむ（♪）

僕は二十年前に突発性難聴という耳の病気をして音痴になってしまいましたが、昔はもうちょっと上手く歌えたのです。中学一年ってみんな恥ずかしがって真面目に歌わないのですけれど、僕は今もこうやって歌うぐらいだから当時も羞恥心がなかったので（笑い）、一生懸命歌ったのです。そうすると音楽が4になったのです。僕は大学は最初理学部に入ったので数学は得意だったのです。数学の研究者とか先生になりたいと思っていたので、通知簿も4とかたまに5とかもらっていました。ところが、手とか足とかが不自由だったので、例えば体育は2か3でした。見てもらったわかるように足がまともでないから靴がはけない。踏んでいたのです。普通に靴をはくと指がものすごく痛いのです。だから五〇m走も上手く走れません。ボール投げも、右手の指が二、三本しかなくて握力が普通の人よりないから上手くできない。左目が見えないから、遠近感もしっかりとつかめない。鉄棒も、逆上がりはできたけれど、その他があまりできない。ということで、障害があるから可哀想だと思って1はさすがにつかなかったけれど、2が多かったのです。そして、同じように苦手だったのが音楽です。みなさんの中には保育科の学生さんもおられるので、

将来、幼稚園などの先生になる方もおられると思います。音楽は、音を楽しむです。僕は音痴で、絶対音感も相対音感もないけれど、歌が好きだったのです。しかし、みなさんも知っているように、小学校の高学年からはリコーダー、縦笛の授業が中心です。でも指がないから縦笛なんか吹けませんよね。だから僕は音楽もだいたい2か3だったのです。一生懸命やっても笛が吹けない。ところが、中学一年の時の音楽の先生、名前は今でも覚えています、井上歌子先生、本名です。音楽関係で知っている先生もおられるかもしれませんが、五十年近く前、京都の下鴨中学校で音楽を教えていたのが井上歌子先生です。この先生は名前の通り、歌が好きだったのです。だから、他の先生だったら縦笛の実技試験をするところを、代わりに『椰子の実』の歌の試験をされたのです。みんなは恥ずかしがって歌わないのだけれど、僕は羞恥心がないので、今よりももうちょっと良い声で歌ったのです。そうすると、僕の人生で一回だけ4がついたのです。また後で2とか3に戻るのですけれどね。数学の5ではなく、この一回だけの音楽4が、私を今まで支えつづけてくれたのです。それで、僕はこの『椰子の実』の二番の歌詞を、一番の歌詞は忘れてしまったのに、今でも鮮烈に覚えているのです。

聴く（聞く）ことの力

ここでみなさんに何を言いたいのかというと、「心の声を聞く」ということです。聞くことはものすごく大事です。井上先生は僕の心を聞いてくださったのです。僕には障害があるから笛は上手く吹けません。しかし、音を楽しむ、音楽が好きです。だから、下手なりに、一生懸命『椰子の実』を歌います。――ということを「聞く」。これがものすごく大切です。今日も、僕がお話をしているから僕が主人公みたいだけれども、本当の主人公はみなさんです。僕の話を聞いてくださっているみなさんが本当の主人公なのです。

朝日新聞で『折々のことば』を書いている哲学者の鷲田清一さんという方がおられますが、その人が書いた『「聴く」ことの力』という本があります。その本には「聴く（聞く）ことが大事」だと書かれています。みなさんの中には将来看護師になろうと思っている人もいると思います。社会福祉士や精神保健福祉士になろうと思っている人もいると思います。保育士になろうと思っている人もいると思います。幼稚園の先生になろうと思っている人もいると思います。結婚してやさしいお母さんになりたいと思っている人もいると思

います。病人の言葉を聞いたり、障害者の言葉を聞いたり、子どもの言葉を聞いたり、高齢者の言葉を聞いたり、弱い立場の人の言葉を聞くことはものすごく大事なことです。僕のような障害者で、歌も下手だけれども、音を楽しむ、音楽が好きだ――そういう魂の叫びを聞いてくださった井上先生みたいに、みなさんも「聞く」ことがまず第一の出発点なのです。鷲田先生がどういう例を挙げられているかというと、特に看護師さんになる人は聞いてもらいたいと思うのですが、医師に「あなたは重い病気です」とかいろいろ言われて、「もうダメだ」という患者さんも中にはいると思います。これも、一種の呪いの言葉と言えるでしょう。そうすると、「いや、そんなこと言っちゃいけませんよ。頑張ってください」というのが普通のお医者さんであり、看護師さんだと思うのです。でも、精神科のお医者さんとか、精神科病棟の看護師さんは、「あなた、頑張りなさいよ」と言うんじゃなくて、その前に一つ言葉を足すのです。「先生、もう私ダメだと思うのです」と患者さんが言ったら、「ああ、あなたはもうダメなような気がするのですね」と一言つけ加えるのです。つまり、「あなたはもうダメなような気がするのですね」ということで、「私はあなたの言うことを、心で、受けとめましたよ」となるわけです。最初から「そんなこと言ったらいけません。もっと頑張りなさい」と拒否するのじゃなくて、「もうダメなよう

な気がするのですね」という言葉をはさんでくださいと、鷲田先生はおっしゃいます。つまり、相手の言うことを反復するのです。反復することによって、「あなたの訴えを受けとめましたよ」すなわち、苦しんでいる、障害者とか、病人とか、子どもとか、高齢者とか、弱い立場の人間が発する声を、私は「承認」しましたよ。「あなたという人間の心の叫びを、私は全身で受けとめましたよ」、そういう「聴く（聞く）」ことの大切さを鷲田先生は言っているわけです。患者さんを励ますことは、その次の段階の仕事です。

これからみなさんは、僕なんかとは違って何十年も生きていくことになります。そういう弱い立場の人、困った立場の人と出会うこともあると思います。その人たちを承認して、身体ごと受けとめる。そういうことをお願いしたいと思います。

内閉という生き方と、承認という生き方はまったく違うのですけれど、どちらも障害者の生き方としては大事なものだと思います。でも、繰り返しますが、内閉は平凡な私たちには、とうてい出来そうもない、とても困難な生き方です。ですから、心が身体に邪魔をされて、時には「呪い」の言葉を発してしまう弱い人間であっても、その彼／彼女を愛すべき存在として承認してもらいたいのです。

弱者の声を聞く

時間がないので終わりにしますが、この大学の一番大事な人である親鸞聖人、それから法然上人のお話です。法然上人や親鸞聖人は、当時の仏教界をコロッと変えられました。穢れが多いと言われていた女性とか、旧仏教の不殺生戒を強調する立場から動物を殺す仕事に携わっているという意味で「あなたは極楽浄土へは行けませんよ」と言われた漁夫さんとか、弱い立場の人は、昔の仏教ではきびしく差別されていた面があるのですが、それをひっくり返して、「悪人」と呼ばれるような弱い立場である人ほど、お坊さんである法然上人や親鸞聖人がその悩みや苦しみを受けとめて、その人たちこそが救われると考えないといけないのだと、説かれたのです。

ただ、これには一つだけ危険な落とし穴があります。さっきの乙武さんの話を思い出してもらいたいと思いますが、乙武さんは不倫をしました。でも、「法然上人も、親鸞聖人も、悪人こそが極楽へ行けると言ってる。だから私は浮気をしたけれど救われる」と思っていたら大間違いですよね。親鸞聖人の言葉をまとめた唯円の『歎異抄』という本があり

ますが（これは学者によっては親鸞聖人の言葉を忠実に伝えてないという意見もあるのですけれど）、これが親鸞聖人の言葉を忠実に受け継いでいると仮定して、「親鸞聖人は悪いことをしても極楽へ行けるとおっしゃっているのだから、私は浮気をする」と言ったら大間違いです。それを本願ぼこりと言いますが、そうなってはいけない。仏さまがみんなを救ってくださるというのを逆手にとって、悪いことをし放題というのは大間違いです。やっぱり、乙武さんは悪に居直らずに反省しないといけないと思います。

スクール・ウォーズ

それが間違いだとした上でみなさんに訴えたいのは、みなさんはこれから長い人生を歩まれるけれども、その時に、いろんな障害を持った人とか、病気の人とか、子どもさんとか、お年寄りとか、弱い立場の人に出会われると思います。その場合にはその人たちの身体ごとまず受けとめて、彼らの言うことを聞いて、彼らを愛してください。

若いみなさんは、三〇年以上前に放映された「スクール・ウォーズ」という青春スポーツドラマはご存じないと思います。校内暴力で荒廃していた京都の伏見工業高校（当時）

の弱体ラグビー部を、ひとりの青年教師が立て直し、わずか七年にして花園での全国優勝を成し遂げた実話をモデルとした、熱血ドラマです。

ヒーロー

孤独が魂（こころ）を閉じ込めても
ひとりきりじゃないよと　あなた
愛を口うつしに教えてあげたい（♪）

というちょっとドキッとするフレーズのある主題歌『ヒーロー』（麻倉未稀さんが熱唱しています）も、元気の出る素晴らしい歌でした。そこには、「たとえあなたが『学校なんかなくなってしまえ』という呪いの言葉を発しても、校内暴力を振るうことがあっても、私たちはあなたをひとりぼっちにはしませんよ」というメッセージ、すなわち「私たちはあなたを『愛すべき存在』として承認しますよ」というメッセージが込められています。「ひとりきりじゃないよ」という箇所は、『ふれあい』の「ひとはみなひとりでは　生きて

『眞實心』第三十八集　平成28年度2017年3月発行（京都光華女子大学）

ゆけないものだから」という歌詞と通じています。そう言えば、このドラマで繰り返し強調される「One for All, All for One（ひとりはみんなのために・みんなはひとりのために）」というラグビー精神を表す言葉は、社会保障（特に社会保険）の共助の精神と正確に合致しているように思います。私たちが生きていくためには自助＝自力だけでは不可能であり、時には共助や公助が必要だという社会福祉の精神と、自力の立場を否定された法然上人や親鸞聖人の他力の教えがどう関係しているかは、これからみなさん自身が考え続けていってください。

愛することと聞くこと

今、ワールド・カップでの五郎丸歩選手の活躍などをキッカケにラグビー・ブームがわきあがっていますが、この「スクール・ウォーズ」も当時ちょっとしたブームを惹き起こして、このドラマを見てラグビーを始めた高校生から後の全日本代表が誕生しています。そのような社会的影響のあったドラマの主人公である青年教師のかつての恩師が、試合でミスをした仲間に激怒した中学時代の彼に向って諭した言葉が、「愛とは、相手を信じ、

待ち、そして許すことだ」というものです。なかなか素敵な言葉だと思いませんか。しかし、私は、それに、「聴く（聞く）」ということを付け加えたいと思います。ですから、愛するというのは、「信じて、待って、聞いて、許す」こととなります。相手をまず信じる。次に、相手が心を開くのを待つ。そして相手が、さっき言いました「みんなレプラになれ」とか「強ければそれでいいのだ」とか「もう私はダメだ」という呪いの言葉を発するようであっても、自分が信じられていると思うようになって本当の心を開いてくれるように、その言葉を聞く。たとえその呪いの言葉が不快だなと思っても、「この人は苦しいから呪いの言葉を吐いたのだな」と許す。相手を「信じて、待って、聞いて、許す」――それが相手を「承認」するということです。相手の人格を認めるということです。相手の人間性を愛するということです。そうなってこそ、さっきの中村雅俊さんの歌のように、「人はひとりでは生きていけない　だからみんなで助け合おう」、タイガーマスクの歌のように、「それだからみんなの幸せ祈るのさ」となって、「愛」のある良い社会が生まれるのではないかと思います。僕はもうおじいさんですぐにお墓に入ってしまうと思いますが、みなさんはこれから何十年と長い人生を歩まれると思います。今日の僕の話はつまらない話でしたけれど、ちょっとヒントにしてもらって、心に留めていただいて、素晴らしい人

生を歩んでもらいたいなと思います。第三部は尻切れトンボになりましたが、これで話を終わらせてもらいます。（拍手）

――二〇一六年五月二七日――

［お詫びと追記］

女ひとり

音痴の私が、下手くそな『椰子の実』などを歌ったために、後半の時間に余裕がなくなり、肝心の第三部がまったくの尻切れトンボ状態となって、「何が言いたいのか分からない」ような講演になってしまったことについて、まず聴衆であったみなさんに、心よりお詫びしたいと思います。

予定では、最後に、「♪京都　大原　三千院　恋につかれた女がひとり」で始まる、光華で学ぶみなさんのような「京おんな」のテーマソング『女ひとり』（元々はデュークエイセスのヒット曲です）の二番「♪京都　栂尾　高山寺…」を歌って（!!）、その高山寺に明恵上人という、親鸞聖人と同年生まれのライヴァルがおられたことを紹介するつもりでいました。高山寺はもともと「鳥獣戯画」が伝わっているお寺として有名でしたが、それに加えて明恵上人が自分の見た夢の克明な記録を日記に残していたことが、河合隼雄さんの『明恵　夢を生きる』という著書で紹介されたこ

とによって、再び注目を集めることになりました。

善　導

学僧と言われるほど学問好きだった明恵上人は、初めはやはり勉強家だった法然上人を尊敬されていたようです。ところが、法然上人の『選択本願念仏集』に出会い、法然上人の批判者へ変わりました。そこで、私は、明恵上人が、『選択本願念仏集』で法然上人が示された、①「菩提心」＝「悟りを求める心」は重視しなくてもいいという考え方、および②従来の「念仏」＝「仏さまの姿を念じる（イメージする）」ことを善導の影響を受けて新たな「念仏」＝「仏さまの名号（阿弥陀仏という仏の名前）を唱える」ことへ転換すべきであるという考え方、を厳しく論難されたことの意味を、塔和子さんの生き方で示した内閉と関連づけて、説明するつもりでした。ちなみに、私の父は四年前、母は昨年亡くなり、京大の向かいの百万遍知恩寺の塔頭のひとつ善導院のお墓で仲良く眠っておりますが、善導の思想と法然上人による「念仏」観の転換の関係、および明恵上人による法然上人批判の意味については、その善導院の高木弘光前住職からご教示をいただきました。また善導院には寺宝として善導の肖像画が伝わり、善導の母国の中国へ里帰りしたこともある、と語って下さいました。記して、今は亡き前住職に感謝いたします。もちろん、私は仏教の門外漢ですので、このあたりの論争に関心をお持ちの方は、一郷学長をはじめ仏教学を専攻されている先生方に直接、質問していただきたく存じます。ここでは、内閉との関連に論点を絞って私の考えているこ

『眞實心』第三十八集　平成28年度2017年3月発行（京都光華女子大学）

とを少しだけ述べることにいたします。

菩　提　心

すなわち心と身体という本講義のテーマからすれば、「内閉」＝「（塔和子さんのように）素晴らしい詩が書けるように心を純粋化すること」、「菩提心」＝「悟りが求められるように心を純粋化すること」、従来の「念仏」＝「仏さまの姿を念じる（イメージする）ことができるように心を純粋化すること」はすべて、すべて食欲や性欲のようなさまざまな欲望に支配された身体が純粋であろうとする心の邪魔をしてしまう、「愚か」な私たち庶民にとっては、それを実現することが著しく困難なものであるという共通点があることに注目すべきだと思われます。下世話な比喩で恐縮ですが、「菩提心」＝「悟りを求める心」をひたすら追求しているつもりでも、お腹がへってグーッと鳴ったならば、その心の中に鰻の蒲焼きの姿が浮かび上ってくるかもしれません。また、従来の「念仏」＝「仏さまの姿を念じる（イメージする）」ことに心を集中しているつもりでも、その仏さまの姿が先ほどお寺の門前で出会った魅力的な女性の姿にいつのまにか変わってしまうこともあると思います。親鸞聖人のように立派な方でも、「夜明けのコーヒー」を飲んで癒された小山内さんや安積さんそして不倫という過ちを犯した乙武さんと同様、仏教の道をまっすぐに歩んでおられる途上においても「性」の問題に悩み続けられたことは、繰り返し正直に告白しておられます。実際、当時は、宮中の女官や人妻と愛し合ったとして、法然上人の弟子の住蓮と安楽が処刑されてしまった時

代であったのです。「性」の悩みもより深くなったことでしょう。そして、もちろん、私たちの身体は、例えば鰻の蒲焼きで食欲を充たさなければ、生き続けていくことはできないものでもあるのです。

二つの念仏

従来の「念仏」の「念」は、ずっと昔に流行した超能力ブームの際に注目された「念写」の念と、「心にイメージする」という点で似ているような気がします。「念写」とは、例えば「心に花をイメージ」しながら額に向けてカメラのシャッターを切れば、花の形が現像された写真にうつっているというものですから、それはまさに超能力者と言われる特殊な能力がある人にしかできない（?）ものであったように、従来の「念仏」も大変な精神集中を必要とするゆえに、私たち一般の庶民には、なかなか実践することが困難なものだったと言えると思います。私たちは、自称超能力者のユリ・ゲラーでもなければ、スプーン曲げ少年でもないのですから。善導の思想と出会うことによって、法然上人は、その実践がきわめて困難な従来の「念仏」を、『一枚起請文』に言う「尼入道の無知のともがらと同じゅう」して私たちも行うことができる容易な「念仏」へと変えられたわけです。称名念仏すなわち、「ナムアミダブツ」と発声することは、「尼入道の無知のともがら」と同じに悟りを求めるための仏教の学問や修行を満足に行えない愚かな私たち庶民にも可能なのです。

つまり、内閉であれ、菩提心であれ、従来の意味の念仏であれ、純粋であろうとする心は、食欲や性欲をはじめとするさまざまな欲望に支配された身体によって、邪魔されることが運命づけられているのです（ちょうど今、みなさんが感じておられる「ねむたい」という睡眠欲も、そのような邪魔をする欲望の一つです。金銭欲や名誉欲にも、私たちは心の純粋さを妨げられます）。それは、確かに、「愚か」なことかもしれません。しかし、そのような邪魔がなければ、ひとりの人間＝個人も、全体としての人間＝人類も、生き続けることはできずに、亡んでしまいます。

ところが、学問や修行により「菩提心」を追求し続けた明恵上人は、「みんなてレプラになれ」という呪いの言葉を断固として拒絶した神谷さんと同様、「そんな愚かなことではダメだ」と言われたように思います。

精神のドラマ

もちろん、そもそも仏教は、お釈迦さまが、庶民が生・老・病・死などで苦しむ姿を見て、愛する妻子を残して城を出て、苦行六年の後、ブダガヤの菩提樹の下で悟りをひらかれたことを出発点としていますから、『摧邪輪』という難解な仏教哲学の著作の中で明恵上人が、「菩提心」＝「悟りを求める心」は重要ではないと断定された法然上人を、厳しく批判されたことは、それなりに納得できる気もいたします。しかし、さまざまな欲望に支配された身体が純粋であろうとする心を邪魔し続けている愚かな私たち庶民にとって、塔和子さんのような生き方、神谷さんや明恵上人が要求さ

れる生き方を実践することは、ほとんど不可能だと思われるのです。それでは、愚かな私たちは、仏さまや神さまによって救われることはできなくなります。私は、善導の思想に出会って、従来の超能力者並みの精神集中が求められた「念仏」の意味を誰にでもできる容易なものへと転換された法然上人や親鸞聖人は、むしろ純粋であろうとする心がさまざまな欲望に支配された身体によって邪魔をされてしまう愚かな私たちこそ、救いの手をさしのべなければならない、と考えられたのだと思います。法然上人や親鸞聖人の教えはしばしば「誰にでもできる易行である」とか「自分で努力しない無責任な他力本願である」等々として不当に非難されますが、その背後には「悟り」と「救い」をめぐる壮絶な精神のドラマによる劇的な価値の転換があったのだと思うのです。それが画期的な逆転であったからこそ、明恵上人の反発もヨリ強くなったのだと思います。

庶民の生活の中へ

塔さんの詩には次のような注文がなされていました。すなわち「塔さんの内閉という生き方は、確かにとても立派なものです。他者を承認することも他者から承認されることも求めず内閉による自己聖化のみに努める生き方は文句のつけようのないすばらしいものです。しかし、愚かな私たち庶民は、しばしば純粋であろうとする心が食欲や性欲といったさまざまな欲望に支配された身体に邪魔をされてしまいます。塔さんも、そんな愚かな庶民の生活の中へ、時には出張してきてもらえませんか」と。同様に、法然上人や親鸞聖人は、明恵上人に次のように語られるかもしれません。

「明恵上人の学問や修行によって菩提心を追求するという生き方は、立派なものかもしれません。しかし、愚かな私たちは、しばしば悟りをえるために純粋であろうとする心がさまざまな欲望・悩み・苦しみに支配された身体に邪魔されてしまいます。女性を寄せつけない清僧と言われるあなたも、美しい女性の姿を夢に見た、と日記に記しているそうですね。それならば、明恵さんも、難しい学問や修行のことはたまには忘れて、庶民の生活の中へ時には出張してきて、悩み苦しむ人々を私たちと一緒に救ってあげてくれませんか」と。

明恵上人と親鸞聖人は同年生まれのライヴァルで、法然上人はいわばお二人の祖父といってよいほど、年齢が上でした。ですから、法然上人は、『摧邪輪』における明恵上人による法然上人批判には、直接、答えておられないはずです。しかし、笠原一男さんが注目している次のような親鸞聖人の言葉は、明恵上人による法然上人批判を明らかに念頭に置いておられるような気がします。いわく、「いやしくも、仏教の学問をした人ならば、いよいよ阿弥陀如来の御本意をも知り、悲願の広大の旨を自覚して、（漁夫のような殺生を生業とするゆえに不殺生戒を重視する旧仏教では地獄へ堕ちることが必至とされている）自分のような卑しい身では後生はあぶなかろうと心配している人に対しても、本願は善悪浄穢など問題にしないのだと説いてこそ、学者の甲斐があるというものではないか」と。

〈いのち〉の承認

当時の社会では差別されていた、障害者、女性、漁夫などの悩みを聞き、その障害や生活の悩みや苦しみのため時には呪いの言葉を吐くかもしれない愚かな存在を極楽浄土へ往生すべきものとして「承認」し、「たとえ『菩提心』を追求するための仏教の学問や修行ができなくとも大丈夫ですよ、『仏さまを念ずる（イメージする）』ことが上手にできなくても大丈夫ですよ、ただ『南無阿弥陀仏』と唱えさえすれば、みなさんは極楽浄土へ行くことができますよ」と、社会的弱者である彼／彼女たちに救いの手を差しのべられたのが、ご自身も「愚か」であると共に称されていた法然上人や親鸞聖人であったように思われます。もちろん、お二人の教えは、弱者だけに向けられたものでは決してありません。しかし、弱い立場の人ほど、本願は善悪浄穢など問題にしないという浄土の教えは、その心にヨリ深く刻み込まれたのだと思います。

言うまでもなく、旧仏教の立場を代表するひとりであった明恵上人がとても立派な学僧であることは疑問の余地がありません。ただ、仏教の革新派である法然上人や親鸞聖人の方が、障害者、女性、漁夫など、当時の社会の底辺で悩み苦しんでいた人々の魂の叫びや訴えを「聞き」、彼／彼女たちの不安な心としばしば純粋であろうとする心の邪魔をする身体のすべてをひとまとめにして「承認」することに関しては、明恵上人よりも、上手だったような気がします。

心と身体を合わせて〈いのち〉と表現しますと、法然上人と親鸞聖人は、私の〈いのち〉の叫びをしっかり聞いていて下さった井上歌子先生のように、障害者の〈いのち〉、女性の〈いのち〉、漁夫の〈いのち〉をはっきりと承認し、内閉や菩提心の追求などまったく不可能な愚かな庶民の〈いのち〉であっても、その〈いのち〉を無条件に愛されたのだと思います。

愛とは、「信じ、待ち、聞き、許す」ことです。みなさんには法然上人や親鸞聖人のように「聞く」ことが上手な、障害者のような社会的に弱い立場にある人々の〈いのち〉を愛する人になっていただきたいと思います。

おわりに

本講演の性格上、脚注は省略しましたが、歌謡ショーまでの前半部に関しては、拙著『障害者の〈生〉』（二〇一六年）を、歌謡ショーからの後半部に関しては、拙著『近代日本とマイノリティの〈生―政治学〉』（二〇〇七年）を参照して下さい。図書館にありますので、関心のある方は、是非ご覧下さい。前著では、塔和子さんや乙武洋匡さんのみでなく、川口武久さん（筋委縮性側索硬化症＝ＡＬＳ患者）などの生き方が、内閉のメリットとデメリットを社会哲学的に解明するという観点から分析され、また「浦河べてるの家」に集う精神障害をもつ患者さんたちの、内閉とは正反対の「外開（外に開かれていること）」とでも言うべき生き方の意義が検討されています。後著では、法然上人が『選択本願念仏集』において「選択（せんちゃく乃至せんじゃく）」という方法で「念

仏」の立場に至ったこと、すなわち「菩提心」=「悟りを求める心」に否定的な評価を下したうえで、まず仏教全体を聖道門と浄土門に分けて前者を斥け、次いで浄土門を雑行と正行に分けて前者を拒否し、最後に正行を助業と正定業に分けて前者を排除するというステップを踏んで、正定業すなわち一心に阿弥陀如来の名を唱えることを選択すべきであると結論づけられたことの宗教哲学的意義が分析されています。また、明恵上人が、『摧邪輪』において強調した法然上人の誤り（？）が、この「菩提心を否定する過失」と「聖道門（自力によって現世で証果をえようとする教え）を群賊に喩えた過失」であったことの意味も検討しております。「心」と「身体」の関係について興味をお持ちの方は、ちょっとした考えるためのヒントが見つかるかもしれませんので、右記の両拙著を参照して下されば幸いです。

本稿の校正を終えた翌日、障害者の〈いのち〉の尊さを承認しない男により、「津久井やまゆり園」において現実の出来事とは信じられないほど悲惨な事件が惹き起こされた。この事件について、本稿で論及することはもはや許されないが、この場を借りて、亡くなられた方々のご冥福を祈り、負傷された方々のご快癒を願う気持ちを、記させていただきたく思う。

――二〇一六年七月二五日――